

研究ノート

トルストイの

「懺悔」分析表

—3—

安村 仁志

生涯の出来事 求道の過程	告白、思想（それぞれの時点での考え方、結論）	確信的結論、神、キリスト 教観（二欄の整理を含む）	備考
<p>「全く同一の信仰でありながら、これに悖るような生活をしている人々が信奉している場合には、それが私を反撥し、無意味なものに思いなされ、これに反して、人々がそれに従って生活しているのを見た時には、その同じ信仰が私をひきつけ、正しい合理的なものと観取されたことを思い合わせるにおよんで、私は、何故あの時分に私がこうした信仰を反</p>	<p>11</p> <p>もと</p> <p>信仰と実生活の問題</p> <p>信仰</p> <p>表裏</p> <p>生活</p>		

撥し、これが無意味なものと見たか、そして今になってそれを受け入れ、無量の意義にみちみちているものと見るようになったかを、はっきりとさとり知ったのである」

「私は自分が迷いにおちていたことをさとり、またいかにして迷いにおちたかをさとしたのである」

「私が迷いにおちたのは、正しくない考え方をしたためというよりもむしろ、私がよからぬ生活をしていたためだった」

「私はまた、私の考えの誤りよりも、快樂主義に没頭し、いろいろの卑しい欲情の満足に身をゆだねながら送っていた、特殊な境遇における私の生活そのものの方が、より、多く私の眼から真理を蔽いかくしていたことをさとした」

「私はまた、わが生活は何であるか？という自己の疑問に対して与えられる、それは悪である／という解答が、完全に正しいものであることをさとした。ただ、私だけにしか通用しないその解答を、人生の全般におしひろめていったことだけが、この場合正しくないの

参照

「人生の道」  
“信仰について”

であった」

「人々光よりも闇を愛するは、彼らのなすところ悪なるが故なり。それ悪をなすすべての人は光を憎み、光に來らず。これそのなすところの咎められざらんがためなり。▽という真理を、この時すでにさったのであった」

「人生の意義を理解するためには、何よりもさきに、まず自己の生活を、恵と無意義の連続たらしめないことが必要であって、それからさらに、これを明確に理解するために、やはり理性が必要であるということをとった」

「人類の生活について考察したり論じたりする場合には、あくまでも全人類の生活について考察したり論じたりすべきであって、人生におけるほんの少数の寄生虫の生活を土台にして、これを行うべきではないということを、私はさとした」

「この真理は、二二が四というがごとくつねに真理である。が、それにもかかわらず、今までこれを認識しなかった」

自己をよくない人  
人間と認識すること  
への恐れ

参照

聖書「ヨハネによる福音書」

三章十九・二〇節

比

ヨハネ八章十二節

「ヨハネの第一の手紙」

一章八―十節

「そして私は真理を認識することができた」

「自己を善人と感ずることの方が、二二が四の真理を認めることよりも、私にとって、一層大切であり切実であったのである」

「私は善良な人々を愛し、自己を憎んだ」

「(われわれのように富裕で、有閑無為なすべての人は)……そうした狂人であることをさとしたのである。少くともこの私は、まさしくそういう狂人なのであった」

「鳥は翔び、食物を集め、そして巣を作らなければならぬように、この世の生をうけているのだ。……私は、鳥がそういう仕事をやっているのを見る時に、彼らの喜びをうれしく思うのである」

「山羊や兎や狼は、身を肥やし、子を生み、子供たちを養わなければならないように、この世の生をうけている。そして彼らがそうし

首斬り役人、酔漢、  
狂人(彼にとって  
人生は最大の悪で  
あると言う)

鳥の幸福

山羊の幸福

比 聖書

「マタイによる福音書」  
六章二六～二九節

「三十年にわたる意識的生活において、……私は万人のための生活をしなかったばかりでなく、自分一人のためにさえ、生活の資を稼ごうとしなかった。まるで寄生虫のような生活が続けて来た」

対 比

た仕事をやっている時、私の胸には、彼らは幸福でありその生活は正しいという、堅い認識が生まれるのである」

「しからば人間はいかなることをなすべきで

あるか？ 人間もまた動物と同じように、その生活をいとまなければならぬが、ただ、自分一人でそれをやったら人間は滅亡しなければならぬのであって、あくまでもそれを自分一人のためではなく、万人のために行わなければならないのだという、この点に相違が存するのである。で、人間が自分一人のためではなく万人のために生をいとなんでいる場合、私の胸には、あの人は幸福だ、あの人の生活は正しいという、堅い信念が湧き出るのである」

「宇宙の生活は何者かの意志によって行われている。——何者かが宇宙全体のこの生活とわれら自身の生活とによって、何か知れないが自己の仕事をこなしているのである。この意志の意味するところをさとりたいたいという希望をいだくならば、われわれはまず何をおいても、その意志の命に服し、その意志がわれわれに望むものを実行しなければならぬ。もしも私が自分に望まれていることを実行しないならば、

農民の生活に通ずる

「コザック」(一八六三年)

「幸福は他人のために生きることのうちにあるのだ。これは明白だ。」  
中村白葉訳

↓非常にトルストイ的である

参照

「われわれが自分の個性として知っているもの、およびわれわれがこの宇宙全体において見たり聞いたり触れたりする事柄の出来るすべてのもの以外、さらに目に

私は永久に自分に望まれていることが何であるかをさとり得ないし、われわれ全体および宇宙全体に望まれていることが何であるかはなおさらさとり得ないであろう」

「主人の意志のままに行なっている人々は、……自分の主人を難じないのである。——われわれが家畜のように考えていた人々、単純な、教育のない、労働を事とする人々は、自分の主人を難じない。これに反してわれわれ、学者とか賢人とか言われる連中は、いたずらに主人の富を貪り食い、主人がわれわれに望むことを行わず、なおその上に、車座になつてどっしりと坐り込み、詮議立てをするのであった。……そしてついに、われわれの主人は莫迦者である、とか、いや、主人なんてそんな者はいやしない、とか言うところまで、その詮議立てを進めて行った」

素裸な飢えた乞食  
← 家に連れてこられ  
← 食物を与えられる  
← 仕事を与えられる  
← 理屈なしに働く  
← 働く過程で理屈を  
知る  
← より高度な仕事へ  
← より深く構造を理  
解、より深く参与  
← 主人を難じない

見えない肉体を具  
備しない、始めも  
なければ終わりの  
ない何ものかが存  
在し、この何もの  
かがすべてのもの  
に生命を与えてい  
る。そしてこの何  
ものかが無かった  
ら他のなにものも  
存在しないだろう  
と思われるのだ。  
この本源をわれわ  
れは神と名づける」

「人生の道」  
著者の言葉二  
原久一郎訳

参照

聖書「ルカによる福音書」十二章四十一、四十八節、  
「マタイによる福音書」二十五章十四、三十節  
比「人は何で生きるか」

「われわれは元来聡明な人間である、われわれは自分勝手に、何の役にも立たない者と思ひ込んでいるだけなのだ、だからわれわれは何とかし

て、まずこの境地を脱却しなければならない。——とうとう、こんな風にまで思い込んでしまったのである」

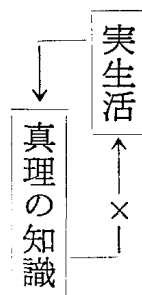
## 12

額に汗して働く大衆の眞の生活を発見

「この一年間、たえず私の心は、私が今まで語って来たような考察や観察と同時に、一種不可思議な苦しい感情に悩まされ続けたのである」

「▲真理の知識は実生活によってのみ獲得される▼という信念は、私を駆って、自己の生活の正しさを疑わしめた。が、私に自己の例外的な境地から脱出して、額に汗してせせと働いている大衆の眞の生活を発見し、そうした生活だけが眞の生活であることをさとり得た。そしてこの一事によって、私ははじめて救われたのである」

「もしも私が人生とその意義とを理解したいと思うなら、私はまず自ら、寄生虫の生活でなく、眞の生活をいとまねばならない。そしてさらに、人類が人生に与えている意義を受けいれ、そうした生活と融合し、そうした生活を信奉しなければならぬ。——私はこれをさとしたのである」



「私はこの感情を、神を求める気持とよりほか、呼ぶことができない」

「神に対するこの探求は、理性の上の論議で

はなく、まさしく感情の働きであった」

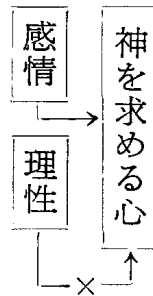
「この探求は……心から直接生まれ出たものだったからである」

「それは孤立無援の境地を恐れる気持であり、自分と没交渉なすべてのものの間における孤独感であり、そうしてさらに、何ものかの助けを望む気持であった」

「神の实在を立証することの不可能さを固く信じていたにもかかわらず、……なおかつ、私は神を求めてやまなかった。神を求め、早晚彼を発見することができるという期待をたえず持っていた。そして私は、古い習慣に従って、自分が求めているがらなお見いださずにいる者その者に向って、祈りを捧げているのだった」

「私は時々心の中で、神の实在を立証することは不可能であるという、カントやショーペンハウエルの理論をくり返したり、それを改めて吟味したり、また反駁しかけたりした。……この私が存在する、すなわちそれには原因があり、さらにいろいろの原因の原因があるのだ。そし

孤独感 ↓ 助けを望む



『古い習慣』

幼年時代への回帰



「私はこの観念の上に  
立ち、全力を傾注して  
この原因の实在を認識  
しようと努めた」

てこの万物の原因は、われわれが神と名づけるものである」

「自分を統御する目に見えぬ力の存在するこ  
とを自覚すると同時に、たちまち私は生の可  
能を感じるのであった」

「が、私はさらに自分にたずねた。『それな  
らばこの原因とは、この力とは、一体どんな  
ものであるか？ 私はそれをどんな風に考え  
たらよいのか？ 私が神と呼んでいるものに  
対して、私はいかなる態度を取るべきか？』」  
「が、この疑問に対しては、すでに私のよく  
知っている答えが出て来るばかりであった。  
『彼は万物の創造者であり、天福を授ける者  
その者である』』こういう答えは私を満足させ  
なかった」

「そして私は自己の内部で、生きて行くため  
になくてかなわぬ大切なものが、崩壊するよ  
うな気持をおぼえた。私ははげしい恐怖にお

神を自覚

↓  
生の可能

疑問

『神とは？』

『神に対する態度  
は？』

恐怖心

## 祈りと絶望

ちた」

「自分の探し求めている者に向って、助けてくれと祈りはじめた。が、しかし、そうした祈りを続けられ続けるほど、彼が私の祈願を聴きとどけてくれないこと、跪いて祈願することのできるような対象など何一つ無いというところが、次第にはつきりして来た」

「私は、神はないのだという絶望を胸にいだいて、言うのだった。△主よ、われを憐れみ、われを救い給え／主よ、ああわが神よ、われを教え導き給え／▽が、誰も私に憐れみをたれる者はなかった」

「そして私は、自分の生活が停止しているような気持をおぼえた次第であった」

「が、しかし、私はふたたび他のいろいろな方面から、俺は何の動機も原因も意味もなしにこの世へ出て来たはずがない、……そうした認識に舞い戻って来るのだった」

「が、神の存在の認識からふたたび私は、彼・  
に對するわれわれの関  
係の探索に移る」

「何者か、私が私を愛して私をこの世へ生み出してくれたという事実を、私は自分に蔽い隠すことはできない。しからばその何者かとは誰であるか？　ここで私はまたしても、神に逢着するのであった」

「彼は私の探求や、絶望や、苦闘を知っている。それらのものをちやんと見ている。《神は存在する》とわれとわが心に私は言った。そして一瞬間これを認識するが早い、とたんに内部に生命がいきいきと発揚され、私は存在の可能と喜悦とを感じるのであった」

神の存在を認識

生存の可能と喜悦

「するとまたしても私の眼には、己れの子なる救世主をこの世へ送った、三位一体のわれわれの創造主なる神の姿が、想像されて来る。そしてふたたび、世界から、また私から、切り離されたこの神は、私の眼前に、氷のように解けて、ふたたび何にも残らなくなり、そしてふたたび生の泉は涸渇する。私はふたたび絶望に陥り、自殺よりほかにとるべき手段がないような気持になって来る」

トルストイにとつて  
三位一体は理解しえ  
ないことであつた  
参照

「教義神学批判」

第五章

比 聖書「ヨハネによ  
る福音書」

四章十三、十四節

「しかも、何よりいけなかったことには、私は自分がその手段をさえとり得ないことを、同時に感じているのであった」

「二度ならず、三度ならず、幾十度も幾百度も、私はこうした状態に到達した」

「今でもはっきりとおぼえている。早春のことだった。……最近の三年間たえず同じただ一つのことを思い続けてきたように、ただ一つのことを思い続けた。私はふたたび神を探し求めているのであった」

「生の喜悦と蘇生の気持に、胸が躍り出したかと思うと、すぐにまた絶望と、生きていくことができないという自覚に、私の胸はかきむしられるのであった」

△生の喜悦▽と  
△絶望▽の繰り返し  
かえし

「△よろしい、いかなる神も存在しない。▽こう私は自分の心に言うのだった。△この私の想像でない、私のこの生活のように実在する、そんな神なんてものはありはしない。——そんなものは断じてない。何ものも、いかなる奇蹟も、こうした神の存在を立証することはできない、なぜなら、それらの奇蹟そのものが、やはり私の想像であり、おまけに不合理至極な想像だからである▽」

「△しかし、▽と私は自分に反問した。△私が探し求めている者・その者・に対する観念は、神に対する観念は？ この観念はどこから来たのか？▽」

「こう考えてくると同時に、喜悦に躍る生命の波がふたたびもくもくと私の内部にまき起った。周囲にあるすべてのものがいきいきと

——蘇えり、皆それぞれに意義を持って来た」

「けれども私の喜びは長く続いていなかった。智慧がその活動が続けていたからである」

……△観念とは私の内部に醸し出されるものである。……………

……これは私の求めているものではない。これなしには生きて行くことができないもの、それを私は求めているのだ▽」

「すると、ふたたび私の内部や周囲にあるすべてのものが死滅しはじめた」

「が、ここで私は私自身をかえりみた。……そして私は自分の内部に幾百回となくくり返された絶滅感と蘇生感とを思い出した。神を信仰した

「△△神の観念は神ではない▽……………」

神に対する観念は、私が自己の内部に作ったりこわしたりすることのできるものである。

場合だけ、生き甲斐のある気持で生きていられたことを思い出した」――

「神を認識すると同時に、私は生き甲斐のある生活を得る。  
神を忘れ、神に対する信仰を失うと同時に、私は自殺のほか  
に道のない、どんづまりの生活におちるのである」

「△一体このほかに、私は何を求めるのか?▽……△これがすなわち神  
である。これなしには  
生きて行かない者。そ  
の者である。神を知る  
ことと生きることは  
一つである。神はすな  
わち生命である▽」

「そしてこの光はもはや絶対に私を見捨てることがなかった」

「こうしてようやく私は自殺より救われたのである。……いつともなし

絶望感と  
蘇生感

に、徐々に、目立たずに、生の力が私の内部  
で滅ぼされて行き、そして私が生きて行くこ  
とのできない状態に、生活の停止状態に、自  
殺のほか道のない状態に陥ったように、同じ

参照

「人生の道」  
「神」の項他

比

「神に近づきな  
い。そうすれば、  
神は、あなたがた  
に近づいて下さる  
であろう」  
聖書「ヤコブへの  
手紙」四章八節  
\* 「生活」に近い

古い幼年時代、青年  
時代への回帰

く徐々に、目立たずに、いつともなしに、その同じ生の力が内部に復活して来たのである。しかも、不思議なことには、内部に復活して来たその力は、決して新しいものではなく、生涯の初期において、私を支配した力であった」

「私はすべての点において、最も古い幼年時代、青年時代にかえたのであった」

「私は私を創り出し、何ものかを私に望んでいる、目に見えない意志に対する信仰に立ちかえた。わが生活の唯一絶対の目的は、よりよき人になることであるという自覚に、すなわち、この意志とものと融和して生きることであるという自覚に立ちかえた」

「この意志の発現<sup>あらわれ</sup>を、私の窺<sup>うかが</sup>い知れぬ遠い遠い過去において、人類全体が自己の水先案内として創り出したものの中に、見いだすことができるという自覚に立ちかえた」

(幼年時代)

道徳的完成への回帰

「私はギリシア正教の信仰にもとづいて洗礼を施され、この信仰によって養育てられた……」

「懺悔」第一章  
冒頭部

参照

「幼年時代」  
第十五章

参照

「懺悔」第一章

## 自覚の世界

(精神状態)

いつも分らないうち  
に小舟に乗せられて、  
自分の知らないどこか  
の岸から突き出され、  
対岸への方向を示され、  
なれない手に櫂を握ら  
されて、ただ一人置  
きぼりにされる。

↓

「神に対する、道徳的完成に対する、人生に  
意義を与えている伝統に対する、信仰に立ち  
かえった」

「以前は、これらのすべてが無意識的に受  
けいられていたに反して、現在の私は、  
自分がこれなしには生きて行けないことを  
自覚していた。そこに相違があるのだった」

力の限り漕ぐ↓中流で流れに押され目標の地から

離れていく  
流されていく舟人に出くわす

・必死で漕いでいる人  
・流れに抗する人

・漕ぐのをやめた人  
・流れのまにまにただよう人

↓流れにただよう人に目を奪われて方向を忘れが  
ちになる↓流れの真中で完全に方角を忘れ、櫂を  
放り出す↓全く疑いもせず流れに従って下手に下  
っていく人を見て、信じついでいく↓遠くへ流さ  
れていく↓巨岩の群に近づいていく↓岩に乗りあ  
げめっちゃめっちゃになった小舟を見て↓

↓われにかえる↓うしろを振り返ってみ  
る↓執拗に流れにさからって進んでい  
く無数の小舟を見る↓岸を思い出す、  
櫂を思い出す、進路を思い出す、↓流  
れに抗して漕ぎ出す。

(青年時代)



「こうして、生の力は私の内部に復活した。そして私はふたたび生活を始めたのであった」

「岸はすなわち神であり、進路は伝説であり、そして糧は、岸に漕ぎ着くため、すなわち神と合致するために、私に与えられた自由であった」

## 13

「すべてわれわれ人間は神の意志によってこの世へ生まれ出た。そして神はわれわれ人間を、各自がその霊を滅ぼすことも救うこともできるように創り出した。この世の生涯における人間の使命は霊を救うことである。が、霊を救うには、神の意志に従って生きなければならず、神の意志に従って生きるためには、……ひたすら勤労し、……忍耐の徳を養い、そして慈悲深くならなければならない」

「こうした意義を民衆は、牧師によって、また彼らの中に生きているいろいろな伝説によって、彼らに伝えられた……あらゆる教義から獲得するのである」

「この意義は私にとって実に明瞭なものであり、また私の心情にとって非常に親近なもの

であった」

「が、しかしながら、私の周囲に生きている異端ならざるわれわれ民衆の間では、私を反撥する、説明し難いような多くのものが、こうした民衆的信仰の意義と堅く結びついていた。——神祕<sup>\*</sup>、教会の勤行、戒食、聖骸聖像への跪坐礼拝と言ったような奇妙なものが……」

「民衆の信仰の中に入り込んでいく多くのものは、私にとって実に奇妙であつたけれども、私はそれらのすべてを受け入れて、教会の勤行に参じ、朝夕跪いて祈りを捧げ、戒食を守り、斎戒懺悔を怠らなかつた。そして最初の間は、私の理性がそのいずれにも反対しなかつた。前には不可能と思われたものが、今や内部にいかなる反抗をも生み出さなかつた」

「信仰に対する過去と現在の私の態度は、全然相異なるものであつた。前には人生そのものが、無量の意義にみちているように思われ、信仰は私に全然不必要な、不合理な、実生活と何ら繋がりもない教理教条に対する、我田引水の的な裏打ちのように思ひなされていた。……が、今度は、それと正反対で、私は自分の生活が何らの意義も持たないこ

<sup>\*</sup> 神祕とは、サクラメントのこと

「私はつぎのような推理を試みた」

と、持ち得ないものであるということをはっきりと知っていた。そして信仰上のさまざまな教理教条が、不必要なものと思われなかったのみならず、これらの教理教条のみが人生に意義を与えるものだという確信に、疑うべからざる自己の経験によって、私は到達したのである」

「信仰の知識は、理性を具備する全人類と同じように、神秘的な本源より発生する。この本源は神であって、それは、人間の肉体の本源でもあれば、また理性の本源でもある。神から私へ継承的に私の肉体が伝わって来たように、私の理性や人生に對するさとりもまた、神からうけ継いだもの

である。それ故に、人生に対するこのさとの過程におけるいずれの階段も、すべて虚偽ではあり得ない。人々がほんとうに信じているものは、みな真実なはずである。……信仰の本義は、死によって滅せられることのない恒久の意義を人生に与えるという点にある。……それ故に、信仰は、……生活状態や教育程度の種類々な、あらゆる人々の疑問にも、答え得るものである……そして、何故に私は

トルストイの信仰の定義は、いわゆるキリスト教の立場からすれば、罪の問題が考慮されていなくとも、いう点で少なくとも新約的ではない。信仰が常に「信じている姿」としてとらえられる。

「が、しかしながら、私のために信仰の儀式的方面の奇妙さを弁解してくれるこれらの推論も、私にとって人生の唯一事である信仰の分野において、この私が自分の疑惑をさしはさんでいる行為をなすことを自分に許すには、まだどうしても不十分であった」

「私は民衆と一つに融合して、彼らの信仰の儀式的方面をも遵守することができるようになりたいと、全力を傾けて希望した。が、これを実行することができなかった。そんなことをしたが最後、私は自己を偽り、

—— 自分にとってこの上もなく神聖なものを、嘲

生きるか？私の生活から何が生まれるか？  
という、人生に対する永遠の唯一の疑問に答える解答が、やはりただ一つであるとしたら、その解答は、本質において唯一であつても、外形においては無限に異なっている」

宗教、信仰の多様性を認めている。

「が、こういう場合に、わがロシアの新しい神学上のいろいろな著述が、私を助けるために現われたのである」

笑することになるだろう。——そんな感じがするのだった」

「これらの神学者達のとくところによれば、信仰のいちばん根本的な確証は、確乎不拔な教会の存在である。……教会の信奉するすべてのものが真実だということになって来る。愛によって結びつけられた、したがって真の知識を持っている、そうした信者達の集合としての教会というのが、私の信仰の基礎になった」

「私は自分に言うのだった。……………」

教会が信仰の基礎

神の真理はただ一人の人間の手に掌握され得ない。それは愛によって結びついたすべての人の結合にのみ啓示される。この真理に到達

参照

「教義神学批判」第十三章

比

聖書「テモテへの第一の手紙」三章十五節

「私はこの当時、こうした理論の中に含まれている詭弁に気づいていなかった」

「もし教会のいろいろの儀式に従わなければ、われわれは愛を破壊することになり、↑てはならない。……そして愛を破壊する結果、真理を知得する可能性を失ってしまうのである」

「するためには、われわれは個々別々に分裂してはならない。……愛の前にのみ真理は現われる」

「愛による融合一致は至高の愛をもたらすかも知れないが、絶対に、《ニケヤ信条》の中に明確な言葉で述べられているような、神の真理を与えるものではないということを気づかなかった。また愛は絶対に、ある特定の信仰の表現を、すべての人の融合一致にかくべからざるものとなし得ないものであるということをも気づかなかった」

←

正教会の儀式を受

け入れ、遵奉

「私はこの当時、あらゆる理屈あらゆる矛盾を避けるために、全力を傾けて努力した」

↑↓ 「私の胸にびったりしないあらゆる教会の教条を、できるだけ合理的に説明しようと試みたのであった」

理解し難いものを合理的に説明しようとする試みと苦悩

《ニケヤ信条》  
第一回ニケヤ会議  
(三二五年)で採択  
されたキリスト教  
信仰の主要な教義  
を示した信条

「教会の儀式を遵奉している間、私は自分の理性を抑えつけて、全人類が持っている伝説に、自分を従属させていた。私は自分の先祖達、愛する父母や祖父母と、一つに結びついていていた。……また民衆の中にある、私の尊敬する数百万の人々とも、一つに結びついていていた。のみならず、これらの行為そのものは、少しも悪の分子を含んでいなかった。教会の勤行に参ずべく毎朝床を出る時に、私はいつも、自己の傲慢をやわらげ、過去および現在の同胞とより、親密に接触し、人生の意義を探らんがために、自己の肉体上の安逸を犠牲にするのだという理由から、立派な行為をしている者と思っているのだった」

(「いろいろの卑しい欲情に惑溺すること、私は罪惡と考えていた」)

#### 斎戒懺悔の儀式

#### 毎日の礼拝祈禱

#### あらゆる戒食

「自宅でも、また教会

でも、斎戒懺悔を怠ら

ず、戒食を守り、定め

の時間の祈禱をかなら

ず励行した」

「犠牲がどんな些細なものであるにもせよ、

それらはみな善事のために行われる犠牲であ

った」

「教会の勤行に参じて、その一語々々を深く味わい、できるだけそれに意味をつけようとした」



「この当時の私には、  
生きるために信仰を持  
つことがどうしても必  
要だった」

## 14

「ミサの場合私にとって最も大切と思われたのは、つぎのような言葉であった。△われら一心共同体となりて互いに相愛すべし。……▽そのつぎに来る言葉は、△そして父と子と聖霊とを信ぜん▽云々というのであるが、私はこれを素通りさせているのだった」

「理解することができなかったからである」

「しかし……儀式に意義をつける上には限度があった」

「礼拝式の祈禱の要点がだんだんはつきりして来たとは言いながら、また、△いとも聖らけき神の母なるこれらの主とすべての聖徒とを互いの心に想い出でて、われらが生命を悉く神なるキリストに捧げまつらん▽という祈りの言葉を、どう

参照

聖書「ヨハネによる福音書」

十七章

紙「エペソ人への手紙」

四章二～六節

紙「ピリピ人への手紙」

二章一～五節

「父と子と聖霊」三位一体

にかこうにか自分に説明をつけたとは言  
いながら、また、皇帝や皇族のための祈  
りが頻繁にくり返される事実を……曲が  
りなりにも説明したとは言いながら、…  
敵に打ちかたしめよという祈りを……説

明づけたとは言いながら、——しかし、ヘルビムの讃美歌や、聖  
餐物の神秘などのようなものに対しては、私は全然説明をつける  
ことができなかったか、さもなければ、これらのものに説明をつ  
けようとすれば虚言を弄することになり、その結果神と自分の関  
係をすっかり滅茶々々にしてしまうことになり、信仰のあらゆる  
可能性を完全に失ってしまうことになるという、氣持を与えられ  
ているのだった」

「教会の大祭日の祭典の場合にも、同じよう  
な氣持を経験した。第七日の安息日を追善の  
祈りに捧げること、すなわち神に参ずるため  
に一日を捧げることとは、了解ができた。しかし、大祭日なるものは、私

がその真実を理解する  
ことも想像することも

ヘルビム(ケルビム)  
第二位の天使

正教会には四つの主  
な断食期があるが、  
中でも復活祭前の大  
精進期が最も重視さ  
れる。

出来事に対する記念なのであった。……………そ

してそれらの祭日には……………

いつも行われるのであった。……………

「教会におけるこれらの祭日の勤行の際には私はいつも、自分にとっていちばんくだらないと思われているものが、いちばん重く見られていることを感じた。で私は、自分の靈を和ませてくれるような説明を案じ出すか、さもなければ、自分の心を惑乱させるものを見ないために、目を閉じてしまうのがつねだった」

できないような、かの

キリストの復活という

私にとって全く不可解

な、聖餐の神秘が……

クリスマスを除いた他

の十二の祭日は、いず

れも奇蹟を記念するた

めのものだった。

つまり、私がこれを否

定したくないところか

ら、努めて思うまいと

しているような事柄を

記念するためのそれだ

った。昇天祭、五旬節、

主頭節、聖母祭、など

がそれだった」

トルストイにとって「復活」ということは理解し難いことであつた

\* 正教の十二大祭

聖枝祭、昇天祭、

五旬節、聖母誕生

祭、十字架挙栄

祭、聖母進堂祭、

主の降誕祭、主の

洗礼祭、主の迎接

祭、聖母福音祭、

主の頭栄祭、聖母

就寝祭

昇天祭

復活祭より40日目

キリストの昇天を

記念する

五旬祭

復活祭より50日目

聖霊降臨を記念す

## ジレンマ

「こういう気持がいちばん猛烈に起るのは、最も大切だと一般に思われているところの、その実最も平凡な、洗礼式や聖餐式のような、神秘的儀式に参ずる場合であった」

「それらの行為は、<sup>たましい</sup>霊を乱すもののように思われた。で私は、自己を偽ってそうした行為に参ずるか、あるいはひと思いにこれを放擲してしまいかという、痛いジレンマに陥っていたのだった」

「多くの年をへた後で、はじめて聖秘礼を受けた日に経験したあの苦しい気持を、私は永久に忘れないであろう」

「私は聖秘礼そのものを、キリストの記念のために行われる行為と解し、罪の浄めとキリストの教えの完全な拝受とを意味する行為と解していた。この解釈が牽強附会のものであったにしても、私はその牽強附会に気づいていなかったのである。単純で小心翼翼な司祭の前で、従順な謙讓な気持になって、自己の罪過を悔悟して、心の中のすべての汚れを除くことが、私にとってあまりにも喜ばしかったので、また、これらの戒律の

る  
主頭節

キリストの山上での変容を記念する(八月六日)洗礼、聖餐は、サクラメントの中でも最も重要なもの、プロテスタント教会では、この二つのみがサクラメントとされている

参照

「教義神学批判」  
第十六章

ここでの罪はいわゆる「原罪」ではない

「今こそこれを残酷な

要求だったと言うこと介

ができるけれども、当時の私ははっきりとそう思ったわけではなかった。——ただもう言うに言われぬ苦痛に駆られたことだった」

「また私は自分の心の中に、その忍従を耐え忍ぶ助けとなってくれ

祈禱を書いた神父達の謙譲さと思想の上で合致することが、あまりにも喜ばしかったので……」

「が、しかしながら、私が祭壇に近づいて行き、司祭が私に、私のただ今のみ込もうとしているものが真実の血と肉であると信じていると、あらためて言えと促された時、私は烈しい苦痛を胸におぼえた」

「それは信仰が何であるかを一度も会得しない人の口から出る、実に残酷な要求だったのである」

「私が信仰に引き寄せられたのは、信仰を除いたら破滅以外の何物も見いだし得なかった——絶対に何物も見い出し得なかった——からにはかならない」

「で、私はそれに服従したのである」

「それは卑下と謙譲の気持であった。私は謙虚な気持になり、聖なるものをあざけるよう

参照

聖書「マルコによる福音書」十四章二十二～二十五節  
「コリント人への第一の手紙」十一章二十三～二十九節

正教では、卑下（ヘケノーシス）を大切に  
する

るような気持を見い出したのだった」

「だが、痛烈な打撃はこの時すでに私の心に加えられたのであった」

当時の内的生活

(今では明白、当

時は奇妙なもの)

な感情を絶し、信仰を持ちたいという念願をもって、キリストの血と肉であるという葡萄酒とパンをのみ込んだ<sup>\*</sup>

百姓の巡礼の神・信仰・人生・救いに関する談話を聞く

↓信仰の知識が開かれる

民衆と親しく交わり、人生・信仰に関する批判をきく

↓ますますはつきりと真理を理解する

「聖人列伝」「聖僧言行録」を読む

↓真理を深く理解、愛読書となる、人生の意義を啓示

⇔

教養ある信者に接する、著述を読む

↓一種の懷疑不満、論争の憤りが内部におこる

彼らの言説を討究する

↓真理から遠くへだたり、絶滅の深淵に近づく

「奇蹟を除外して、これらの書物を、思想を表わしている寓話と見た」(マカリーイ大帝の生活、イオアサフ皇子の生活、仏陀史、イオアンズラトウストの言説、井戸の中の旅人の話、黄金を見出した修道僧他

<sup>\*</sup> 聖餐式のことをいう。なお、正教会では聖体機密という

イオアン・ズラトウスト  
四世後半〜五世紀初めの、東方教会の指導者。コンスタンチノープル総主教もつとめた。

「こういう状態で私は  
三年間生きて来た」

「これらの疑惑と苦悶  
にかかわらず、私はい  
ぜんとして正教にしが

## 15

「いくたび私は百姓達の無学無識を羨ましく  
思ったことであろう。私には歴然たるナン  
センスだけしかもたらさない信仰上の教理教  
則が、彼らには少しも虚偽虚飾ではない」

「私が、新しい皈依者のように、少しずつ真  
理の方へ歩み寄り、ただ感覚に導かれてより、  
明るく思われる方へ進んで行きつつあった最  
初の間は、これらの矛盾がさほど私を驚かさ  
なかった」

「が、……私に理解する力がないために理解  
しない事柄と、自己を偽らずには絶対理解で  
きない事柄との間に横たわる一線が、ますま  
すはっきりしたものになってきた」

みついていた」

「が、どうしても解決

せずにはいられない人

生上のいろいろの問題

が、つぎつぎ起ってき

た」

.....

(1) 正教会と他の教会  
との関係

(カトリック教徒、新  
教徒、旧教徒、モロ  
カン教徒などと接触

「これらの問題に対する、私の育てられて  
きた信仰の根本に反する教会の解決が、正  
教に参じ続ける可能性を、完全に私から奪  
い取ってしまった」

「私は彼らの間で、道徳的にレベルの高い、  
ほんとうに信仰している多くの人々を見いだ  
した。私はこれらの人々と兄弟になりたいと  
思った」

「しかも、どうだろう——すべての人を唯一の信仰と愛とによって  
結合するものと思われていたその教えは、——彼らの中の最高の代表  
者達によって代表されるその教えは、——彼らのすべてが虚偽に生き  
ている人間であること、彼らに生の力を与えるものが悪魔の誘惑にす  
ぎないこと、われわれのみが唯一の真理の信仰の下にあるのだという  
ことを、私に告げ知らせたではないか」——正教と他宗派の相互異

モロカン教徒  
正教徒とは対照的  
に精進期間中に牛  
乳(モロコー)を  
飲むのを習慣とし  
た  
旧教徒  
旧信徒(分離派教  
徒)のことである



修道院長、主教、

書物を恥読、多く  
の人に意見を求め  
る

「愛による融合一致の中にのみ真理があると思っていた私の眼に、肝腎の教理教条が、自己の当然生み出すべきはずのものを、破壊しつつあるという事実が、焼きつけられた」

「△いやいや、これはそんなに簡単であるべきはずがない。だのにこれらの人達は、信仰上の二つの証示が互いに相否定する場合にはそのどちらにも、信仰の基礎であるべき唯一の真理がないのだということに気づかないようである。これには何かいわくがあるに違いない。何かその原因がなければならぬ」

「種々様々なあらゆる宗旨の僧侶達、いな、それらの宗旨の最高の代表者達ですら、自分達の安住地が真理の世界であって、他の連中のそれは迷いの世界であるということ、それらの人々のために祈ってやることが自分達のなし得るすべてであるということ以外、私に対して何にもとき聴かせてくれなかった」

— 端視、輕蔑、自惚れ、

旧信徒、パシユーフ教徒（博愛を旨とする絶対他力本願の宗派）、シュツケル教徒（十八世紀にイギリスでクエーカー派から起った宗派で、独身生活、財産の共有等厳格で質素な生活をもットとした。礼拝するとき体を振るのでシェーカール教徒という）たちとも接触

一八七九年夏  
キーエフへ旅行  
修道院、スヒーマ僧  
などを訪ねる  
「ひどく不満をおぼえた」と夫人への手紙に記している

長老、スヒーマ僧  
にたずねる

「彼らは一人として、私のためにこうした悪  
の誘惑を説明しようとする者はなかった」

「私は言ったのである。信仰に帰依せんとするあらゆる不信心者にとって、……何よりも第一の問題となるのは、何故に真理がルーテル教やカトリック教の中にはなくて、ひとり正教の中にのみ存するのか？という疑問である。……真実に信仰している人にとってこうした区別が消滅してしまうような具合に、宗教の高みに立って見た場合こうした区別が全然なくなってしまうような具合に、もっともつと高遠に解釈することはできないものだろうか？……われわれは旧信徒の諸君と手に手をとって、同じ道を進んで行くことができないのだろうか？ 十字を切ったり、ハレルヤを唱えたり、祭壇の周囲をまわったりするやり方を、お前のは違っていると、彼らは断言する。がわれわれは言うのである。《諸君はニケヤ信条を信じ、七つの神秘を存じているが、われわれもまたそれを信ずる者である。どうか肝腎な点だけは大切に保持して下さい。そしてその他の枝葉にわたる点は、諸君の好きなようになすして下さい》……今度は、カトリック教徒の人々に対して、《諸君はこれこれしかじかの事柄を信じているが、これがいちばん主要な事柄なので、この他の Filio-que や法王などに関する事柄は、諸君の好きなように所望して下さい。》われわれと主要な点で一致している新教徒の人々に対しても、同じようなことが言えないだろうか？」

「ここにいたって私は  
すべてをさとした」

「私は信仰を、人生の原動力となるものとして探求しているのだが、

スヒーマ僧  
修道院の苦行的戒  
律を受けた僧位

\*新教の代表とみて  
いるのであろう

旧信徒

古儀式派、ラスユ  
ーリニキとも呼ば  
れ正教公会とは  
異なる見解をもつて  
いた。古いロシア  
の伝統に依拠

七つの神秘

正教会では七つの  
サクラメントがあ  
る。なおサクラメ  
ントは「機密」と  
呼ばれる（正教）

フイリオク

聖霊が「子からも」  
出るとする説で、  
中世カトリック教  
会の説。正教会は  
これに反対

## (2) 戦争と刑罰の問題

った」

正教から離脱してしま

「私はほとんど全く、

注意を向けた」

「私は信仰の名においていかなることが行われていくかという点に

「私は恐怖におののいた」

彼らは人としての一定の義務を他人に対して果たすための、最上の手段を求めているにすぎない……彼らがどれほど迷える兄弟達に対する自己の憐憫を口にしようとも、またそれらの兄弟達のために天帝の玉座に向ってどれほど祈りを捧げていると言おうとも、とにかく地上の業を遂行するためにはどうしても暴力が必要なのだ……正教の見地からいけば明らかに偽りの信仰の火に燃えている異端の信徒が、人生のいちばん重大事なる信仰において、教会の子らを誘惑するのを、どう処置したらよいのか？ 彼らの首をちよん斬ったり牢屋へ入れたりする以外に、どうすることもできないではないか！

信仰の名において  
行われた(る)暴力  
の否定

トルストイは、ここでアレクセイ・ミハイロヴィチ帝時代の焚刑をとりあげているが、この時代は、分離派教徒が生まれた時代である。正教会は彼らを異端とみて激しい迫害を加えた。

「悪に対して悪をもつて報いてはならぬという教えをけずるなら、キリストの教えはすべてむなしなことばとなる」「人生の道」

ロシアに戦争が始まる。(ロシア人がキリストの愛の名において同胞を殺す)

「この事実を考えずにはいらなかった」

「私はキリスト教を信奉する人々によって行われているすべての悪に注意を向けた。……そして恐怖におののいた」

「で、私は疑うことをやめて、今まで自分が結びついて来た信仰の知識にはあまり真理がないということを、全く信ずるに至った」

「以前の私なら、すべての信仰が偽りだと言ったであろう。が、今の私にはそう言い切ることはできなかった」

「一般民衆はみな真理の知識を持っていた。」

……一般民衆は、これなしには生きていられないはずだ」

16

「人を殺すということが、あらゆる信仰の根本に反することであるという」

（悪を行いながら、教会で人々が軍隊の勝利を祈り、信仰の師父が殺人行為を信仰から出る正しい行為として認容するのに直面）

一八七六年  
露土戦争始まる

参照

聖書「出エジプト記」二〇章十三節

「マタイによる福音書」

五章二十一

二十六節

正教会では、戦争時母国の勝利のために祈りがささげられる。日露戦争の時、正教宣教師ニコライ、日本の信者たちは微妙な立場に陥ったと伝え聞く。

「こういう真理の知識は、私にもすでに得られていた。私もそうした知識によって生き、その真実のすべてを感じていた」

「しかしながら、この知識の中にも虚偽な所があった。……私を反撥させた虚偽の分子が、教会の代表者達の間よりも一般民衆の間に少ししかなかったと言いながら、とにかく私は民衆の中にも、虚偽が真実と混淆されているのを見た」

「それらの虚偽はどこから来たか？ それらの真実はどこから来たか？……………」

民衆の信仰にも虚偽のあることを見る

虚偽も真実も、みな伝説の中に含まれているのである。いわゆる経外伝説と使徒書\*に含まれているのである……虚偽も真実もともに、教会と呼ばれるものによって伝えられて

\*聖書のことである

「私はかつて無用の長物として侮蔑とともに放りだした、あの神学の研究に着手した」

「あの時分には、明白な深遠な意義に満ちているように思われる実人生の諸現象が、八方から私を取り囲んでいた……が今の私には、健康な頭脳にびったりしないものを放りだすことを、むしろ喜ばしく思うのだった」

「が、実人生のそうした諸現象から、どこへも身を隠すわけに行かなかった。私の前に開かれた人生の意義に対する唯一の知識は、この教理教条の上にきずかれてあった。……少くとも、これと引き離し難く密接に結びついていた。古い堅い私の頭にどんなに奇異に見えようとも、とにかくそれは唯一の救いの希望なのであった」

「信仰の知識の特殊なものであることを知っている。……私はあらゆるものの説明など求めないだろう。すべてのことの説明は、その

いる」

正教の註解書（マカリイのもの）を批評、ビリュコフによれば、トルストイは、学究的にではなく、単純な、内面的な、常識の批評にかけた。

参照  
「教義神学批判」  
「要約福音書」

はじめのように、無限の中に隠されているはずだということを知っている」

「がしかし私は、この先はどうしても説明し難いという境地まで導いて行かれる程度に、理解を得たいと思うのである。……私が自己の智慧の限度を知っているために説明し難いのだ、——こういう境地まで漕ぎ着けたいと思うのである。説明することのできないあらゆる信条が、信じなければならぬ義務と見えないで、理性の必然的要求と見えるような具合に、これを理解したく思うのである」

「信仰の中に真理があるということ、それはこの私にとって疑うべからざる事実である。が、その中に虚偽がまざっているということも、これまた疑うべからざる事実なのだ。したがって、私は真実と虚偽とを発見して、この両者を区別しなければならぬ。で、私はそういう仕事に取りかかったのである」(一八七九年)

「全き自覚をもって、教会を脱し、キリスト教の教えの中で、砂と黄金とを区別するために、彼は再び、教会の教えとキリストの教えの源泉である福音書とを、入念に研究調査したのだった」

ビリュコフ

「大トルストイⅡ」

原久一郎訳